

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間

会報 No.44

二〇〇八年一月二三日発行

川崎市幸区古市場 2-109
京浜協同劇団内
TEL 044-511-4951
郵便振替 00250-3-18369

謹賀新年



翔輝



書と絵 小野寺 晃

未来に向かって

新たな一歩を

代表世話人 二村 柊子

京浜協同劇団創立五十周年、おめでとうございます。

「京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間」は十二回目のお正月を迎えました。皆様のお力添えに心より感謝いたします。

一九九六年、発足の集いで私たちは

ひとつ 新しい時代にふさわしい私たちの文化活動をめざします。

ひとつ この地で生き、働く仲間とともに平和な明日を切り開く文化活動をめざします。

ひとつ この稽古場を、地域文化の砦にしていきます。

——と宣言しました。

あの日の熱き思いを胸に、これからの一年、そして、それに続く未来に向かって新たな一歩を!!
本年もどうぞよろしくお願いいたします。

二〇〇八年

二〇〇七年『巨匠』公演 〈私的振り返り〉

「私にとつての演劇」の再構築

河村はじめ

『巨匠』公演を終えてひと月余。なるほど「ほとぼり」冷めぬはず。公演を振り返るに未だ渾沌として何をどう語って良いのか正直悩む所です。

今回私は「前町長」という大変大変重い役をやらせていただきました。また、色んな方から羨ましがられましたからきつとオイシイ役でもあったのでしよう。観客や劇団界隈の方が「うまくいった」と褒めて下さった事も謙虚に有難く受け止めます。中間総会の議案書の一節にあった通り、「多分初めて、本気で役作りに挑んだ」感触は確かにあります。その「初めて」とは、「客観」を断念し「主観」に徹する、即ち「役者」として腹を括ること、このことを初めて受け入れたということでしょうか。してその真相は……他のことを考える余裕がなかった、だけのことも知れません。

さて今回の公演の私なりの振り返りをする時、どうしても無視できないのは「仕事との両立」の問題でした。ある稽古の日、「働く者の劇団」という理念でもって私の準備不足を非難されたことがありました。「働く者の劇団」の矜持は仕事を犠牲にすることではないだろうと、ところが私はその時既に（芝

居に注意力をそがれて）職場に大きな迷惑をかけていました。「役を持つ」ことと、今の仕事はどうも競合してしまいます。ただそれが、芝居あるいは仕事の「習熟」によって解決するものなのか、それとも、二つが同じ「創造的」作業であるためにどちらかを断念しなければならぬのか……今の正直な印象は残念ながら後者となり、そうなる何のための総括かという話です（演劇との「訣別」のための総括もありかも知れないが）。

公演成功万々歳と勢いよく行きたいこの機関誌への寄稿ですが、このテーマを避けては全て嘘臭く、後ろめたく、何も語れない自分がいました。こんな時『巨匠』の老人なら私をこう励ますでしょうか、「何でもないよそんなこと、いつかきつとうまく行



「巨匠」の舞台①

(写真：長坂訓弘・以下同)



「巨匠」の舞台②

く……いや、老人がアイデンティティとし拠り所を求めたのは「職業としての俳優」です。では次の台詞ならどうか、「君は貴重な仕事に携わったのだから、もつと誇るべきだ」。周囲の人たちにそう言われて癒されたいものですが、現実もそう甘くはない。業余劇団のテーマは誠に奥深いと言わねばなりません。

「創造」の中身についても少し。縷々述べた悩みも、裏返せば高い所に目標を掲げた結果でもありません。もつとも、脚本から読み取った「正解」が普段の自分と相当に隔たっていたのだからやむを得ません。もちろん明瞭な一つのイメージがあった訳ではなく、最低限のハードルを意識したくらいです。が、「高さ」の目測はほぼ思い通りでした（自慢することじゃないが……）。本番までを振り返り、難渋したのは役の内面作りでした。「前町長」結構な知識人の路線は定めていたものの、色々なダメやアドバイスや計算が頭に渦巻き、微調整する余力も失い、本番直前になって私は「何か一つ超えねば」と虚空を手でまさぐりました。初日前夜に偶然出会ったその



「巨匠」の舞台③

ヒントは、(にとしてはフツーですが) ふと手にした演技の本の中の「役の人物の肉体をまとう」というエクササイズでした。かくして本番初日を爽快に船出し(?!)、しかし毎回「新しく生きる」ための手がかりを何か一つ見つけなければ「墮ちてしまう」、綱渡りの気分でした。転落もあつたかも知れませんが、数多の「印象的な瞬間」が芝居の中で生起しましたが、いま食べ終えた料理の味を反芻することはやめます。

過去の己が敗北し「私」とつての演劇」の再構築を迫られる今回もまた体験の一つとなりました。その意味で最後になりましたがこの作品に関わった全ての方、色んな形で見守って下さった方に感謝申し上げます。「今後」があることを祈りつつ。(劇団員)

次回作も

楽しみにしています

袴田浩之

京浜協同劇団の皆様とは、夏の「はだかの王様」に公募市民で出演させていただいて以来、お付き合っていたいただいています。そして今回初めて定期公演を拝見させていただきました。その記念の作品が今回の「巨匠」でした。しかし素人の私には、なかなか「難解」でした。

今回の公演の場合パンフレットを見れば、およそのストーリーはわかります。時代背景についても、教科書レベルの予備知識はありました。だからむしろ公開稽古を見る前の私の興味の中心は、ストーリーを事前に明かしている中で観客にどのように魅せるのか、そういったところにありました。

公開稽古を見たときの正直な感想は、台本について「説明の台詞が多いなあ」というものでした。また、聞いてもすぐに漢字変換できない熟語など、本当に役者さんは大変だったろうと思います。

いまひとつ緊張感が伝わってこなかった公開稽古と比べて、初日は静かな緊張感が冒頭から感じられ素晴らしかったです。ただ何となく「淡々と」話が展開していった物足りなさも感じています。

特に終盤において、覚悟はしていたもののついに自らの死の時が訪れたその重さを、恐怖・絶望・達

観などといった、その役により様々な形ではあろうけれども、各々に強すぎない程度で、しかしもっと表現されてもいいのではないかと思います。そのほうが理不尽な状況の中での「自然な」死を迎えようとしている場面での「巨匠」の行為が、本人にとっては譲ることの出来ない崇高なものであつたとして表現できるのではないかと。

私は長崎が好きで、原爆といった第二次大戦の悲劇以前にも、秀吉の時代から迫害されたカトリック信徒の話に多く触れる機会がありました。が、「巨匠」の行為からも、長崎で起きた殉教の歴史と重なるものを感じました。そういった心の奥底からの、叫びにならない叫びをもっともつと感じたかったです。

と、勝手なことをいろいろ申し上げましたが、ギャグ漫画的な軽いノリのお芝居が多い昨今、このような精神世界に迫るような作品を上演していただいた京浜協同劇団の皆様感謝申し上げます。次回作も楽しみにしています！



「巨匠」の舞台④

「この人々」って誰？

油上 恵子

公開稽古、本番の二回目、千秋楽と観てきた『巨匠』は、特別な材料や技は使っていないけれどよく煮込んだらだんだんおいしくなった鍋といった感じがしました。客席と舞台が近いスペース京浜の空間もプラスに働き、遠い国の時代劇ではなく、自分たちとさして変わらない人たちが非常な状況に置かれた話というリアリティが醸し出されていました。あえて弱点を探すとすれば、日常的でない抽象的な長台詞や、人が大勢舞台に載ったときの配置など、ある種技術を要する部分でしょうか。

実は、こんな疑問を持っていました。「俳優ならば知識人である」という、日本ではそれほど自明とは思われない論理を、京浜協同劇団は肯定するのだろうか？ 知識人とは何か？ 簿記係として生きるよりも俳優として殺されることの方を求めた老人を、肯定するのだろうか（実際に簿記係をしている人にとって愉快な話ではありませんよね）？ 公演を観て、こうした疑問の答えが得られたわけではなかったのですが、芸術至上主義の専門劇団には決して作れないだろうこの『巨匠』には、なんだかとても説得力があったのでした。

最終的には「京浜らしい芝居だ」と好評を得た『巨

匠』ですが、上演を決めるに当たっては、「一般受けしないから集客が心配」といった反対意見もあったと聞きます。私は、何が「京浜らしい芝居」なのか、「この日、この地で、この人々」との「この人々」がどんな人々をさしているのか、よくは知りませんが、私の希望としては「何の義理もない演劇好きな人にとって、わざわざ時間を割いて足を運び、お金を払って観る価値のある芝居」をやっているってほしいと思います。私自身がそういう芝居を観たいからでもあります。私自身も「何の義理もない演劇好きな人」の反応が最もあてになる評価であり、役者を育ててくれるものだと思うからです。

京浜協同劇団はそういう価値のある芝居ができている劇団だと思うのですが、時々、当の劇団員の皆さん自身がそれを分かってないの



「巨匠」の舞台⑤



「巨匠」の舞台⑥

は？と思うときがあります。今は改善されたようですが、「ミスター・チムニー」のときのチケット管理などは、「劇団員や出演者の直接の知り合い以外の客は来ない」という前提で行われていると思えるところが残念でした。より多くの観客を呼ぶためには、友人知人をがんばって呼ぶよりも、もっと広範囲の演劇好きの人たちに向かって適切な宣伝をしてはいかかと思えます。観たい人はきつともつといます。自発的に観たいと思ってくれる人たちがこそ「この人々」なのではないでしょうか？

とはいえ、「義理で観に来てくれる友人知人」や『巨匠』みたいな作品は難しいから観たくないという人たちは「この人々」ではないと言ってしまうこともできないと思います。きつと正解などはないのでしよう。答えのない疑問や矛盾を隠し味に、いい芝居がこれからはここから生まれていくに違いないと思っています。

「お楽しみ会」開催

地域の子どもたち40人で

山木 健介

二〇〇七年一月二二日に、「クリスマスお楽しみ会」を開催しました。「お楽しみ会」は、劇団の稽古場に地域の人たちが気楽に足を運んでくれる企画はないかということから、まず子どもたちを集めよう、ということから始めました。

二〇〇三年の一月一九日、〇四年の一月二五日、〇五年の一月二三日、〇六年の三月二六日に続く五回目です。



今回は、劇団の稽古場を利用して定期的にダンスのレッスンをしているモダンダンス川崎ジュニア教室の川内さんと子どもたち一〇名に出演していただきました。日ごろのレッスンの成果を発表しようと、元氣よく楽しそうに踊ってくれました。客席の子どもたちも笑顔で見つめていました。ジュニアダンスは前々回に続く出演で、



アダンスの前に「みんなでダンス」をやっていたきました。

マリリンこと劇団の吉武寿美子さんには「おもしろマジック」をやっていたいただきましたが、軽妙なおしゃべりとともにマジックもたいへん見事な楽しいものでした。



プロの腹話術師でもある劇団の城谷護さんには、腹話術の出演のほかにも司会もお願いしました。相棒のゴローちゃんとの腹話術に子どもたちは身を乗り出して見ていました。

前回は川内さんに「みんなでダンス」を指導していただき、文字どおり会場にいる人全員で体を動かし、心身ともにリラックスするダンスでした。好評でしたので、今回もジュニア



「この日、この地で、この人々と」を合言葉に活動を続けている京浜協同劇団は、二〇〇七年には四回の公演を行いました。新しい劇団員も加わってパワフルな活動を続けています。京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間としては、「この日、この地で、この人々と」の思想を劇団員とともに実践すべく歩んできましたが、「お楽しみ会」でちよつとは地域に貢献できたかな、と思っています。

今回は四〇名の子どもたちと、子どもの父母やスタッフも加えて合計八〇名以上の参加でした。文化の仲間の会員全員にチラシをお送りしましたが、そのチラシを見て「おもしろそうだな」と、来ていただいた会員が数名いました。ありがとうございます。文化の仲間世話人会が進めた企画ですが、次回の「お楽しみ会」には、さらに多くの会員の皆さんに参加していただけるように企画の充実を図りたいと思います。
(写真とも・文化の仲間世話人)

最後に観客参加企画として、輪投げを行いました。子どもたちは日ご

京浜の演劇・戦後編 その序章⑤

東宝争議の弾圧が

解放感を吹っ飛ばす

須田 輪太郎

一九四八年一月に発足した神奈川自立劇団協議会は、予定通り九月下旬に、神自協コンクールを弘明寺にあつた横浜国大工学部の講堂を会場に、三日間9劇団の参加で行なつた。最優秀賞を獲得した東芝小向の大橋喜一作「芽生え」を始め、富士電機・日本冶金・浦賀ドック・日本精工・東芝柳町など、創作劇が殆どを占め、東京のコンクールと較べて見劣りしない高い水準の作品で埋められていたと好評だった。蛇足を付け足すと、国鉄大船「出場線事務室」というのが最優秀になつたが、国鉄大井工機部から半年前に大船分工場へ転属したボクが、初めて書いて演出した凡作で、どうも鼻目(ひいき)にみても受賞する舞台ではないと、その後もずっと思い続けている。

神自協加盟の自立劇団の殆どが、大企業に所属するいわば企業内演劇サークルで、コンクールなどへ参加の時は、労組と会社の双方からの声援を受けて、会社対抗の野球試合に行くようだったが、「神自協コンクールの二回目はもう出来ないだろう」という暗い予感が、関係者の胸の内に澱(よど)んでいた。

四八年に入つてすぐ、GHQ(連合軍総司令部)は全通ストの中止命令を出し、米陸軍長官の「日本を共産主義の防壁にする」という声明を新聞・ラジオで大々的に報道するなど、労働組合や民主的文化運動を抑制する方向へ占領政策の転換が見え始めた。神自協コンクールの一月前(ひと)の八月十九日、世田谷砦の東宝撮影所周辺でそれを象徴する事件が起こつた。

東宝映画は、撮影所従業員二七〇名を始め、全国千二百人に上る大量解雇を発表(四月)。その撤回を求める第三次東宝争議は、第二組合への引抜きやスト反対派の人々のスト破りの動きを阻止するため、争議団が撮影所を閉鎖した。会社側はそれを不法占拠だといって、仮処分かなにかで争議団を排除しようとした。資料がないので記憶でいうと「極東委員会の労働組合に関する十六原則」という米・英・ソ・豪・蘭五ヶ国の合意条項で、占領下の日本での労働組合運動の発展と労働者の権利を擁護する決議がある。その中で、争議中の組合の職場の保全と管理のためのロックアウトを認めている筈なのだ。

八月十九日。国鉄大船のボクの同僚で大の映画好きのNは、前日から欠勤して東宝のストの支援に赴いた。支援といつてもN君の場合は、若林セツコ・岸旗江・中北千枝子といった好きな女優さんの素顔をすぐ傍で見られるという、野次馬的な期待が大き

かつたのだが、実は前日の十八日にも彼は東宝撮影所へ行っていたのだ。

同僚のN君が八月十八日に、東宝のストの応援に行った時、正面のバリケードを挟んで争議団と武装警官百人くらいとの睨(にら)み合い状況は続いてたうだ。国鉄の青い作業服を着ていたので所内にすぐ入れたが、お目当ての女優さんは殆ど見られず、集会の参加とスクラムを組んで歌つたりシユプレッヒコールを繰り返していただけだが、俳優の沼崎勲や亀井文夫監督と握手できて感激したと後で語っている。

来なかつたのは軍艦だけ

八月十九日。前日と同様に東宝スト支援のため、小田急線成城学園駅に降り立つたN君は、思わず立ち竦(すく)んでしまった。駅から撮影所まで八百メートルの道路が、武装警官とアメリカGIで埋まっていた、争議関係者ばかりか地域住民も通行不能の状態。

武装警官千人・米軍の騎兵師団所属の一個中隊・戦車七台・飛行機三機が出動して、空前絶後の東宝争議弾圧が敢行されたのだ。Nはスト支援を諦めた。占領軍は日本人解放のための軍隊に非ずという認識が、この事件を契機に漸く広まって行った。

(つづく)

(人形劇団ひとみ座・前代表)

「ミスター・チムニー」再演へ

期待に応えて

東京・茅ヶ崎でも

「ミスター・チムニー! 天空百三十尺の男」について、城谷護制作チームに聞きました。

——「ミスター・チムニー」を再演されるそうですが……。

はい、4月から6月にかけて川崎・東京・茅ヶ崎の3か所です。1年前の初演は川崎と横浜でやったんですが、予約の段階で札止めという盛況ぶりだったんですよ。お断りするなんて、めったにないことなんです。おかげさまで評判がよかったですよ。

——なぜ、東京でやることになったんですか？
初演の舞台を観た人たちから「ぜひ東京でも」と言われたのです。

東京では以前はときどきやっていたのですが、このところは無沙汰で、最近では一九九九年に「鉄道員（ぼっばや）」をやって以来九年ぶりになります。今回は両国のシアターXという、二五〇人位の理想的な劇場です。そこに上田美佐さんというプロデューサーがいらっしゃって、お願いにあがったところ、話を聞いてくださり、「あなたたちの劇団とシアターXとの提携公演にしてあげましょう」と言われたのです。この劇場はいい芝居しか採り上げないとされている劇場で、演劇人にとっては夢の

ようなことです。

それだけにぜひ成功させたいと思って、正月休み返上で東京に要請行動を繰り返しているところなんです。

——茅ヶ崎ではどういうことであることになったのですか？

「煙突男」の田辺潔という人が青春時代を藤沢の鵜沼で過ごしているのです。彼が「労働者のために生涯を捧げよう」と決意したのがその地だったのです。初演を観てくださった藤沢の保坂治男さんや桑原玲子さん、茅ヶ崎の小野靖子さんたちが「この芝居はいい。ぜひ、ゆかりの地湘南でも」と熱望されたのです。すでに、その人たちが中心となって「茅ヶ崎公演を成功させたい会」というユニークな名前の会が作られ、さまざまな活動が進められています。茅ヶ崎では今から十七年前の一九九〇年に「はだしのゲン」を劇化した「麦の穂のように」という劇を上演しています。このときも実行委員会がなんと千七百人もお客さんを集めてくださったのです。今回は小ホールで昼夜二回の上演で八百人を目指します。

——出演者などは変わるのですか？

何人か入れ替わります。特に、東京の「演劇集団土くれ」という仲間の集団が数名出演してくれることになりました。この集団は四十年の歴史をもち、井上ひさしの「闇に咲く花」「紙屋町さくらホテル」などを上演してきた力のある劇団です。他にも市民参加で新しい人たちが出演してくれます。稽古も初演に負けないうらしばっちり組まれていて、杉本孝司演出は張り切っています。

* * *



●京浜協同劇団 創立五十周年記念公演

「ミスター・チムニー! 天空百三十尺の男」

和田庸子作、杉本孝司演出

(川崎)スペース京浜 4月25日(金) 昼夜、26日(土) 昼夜、27日(日) 昼

(東京)シアターX(カイ) 5月17日(土) 昼夜、18日(日) 昼

(茅ヶ崎)茅ヶ崎市民文化会館小ホール 6月7日(土) 昼夜

いずれも昼の部は午後2時、夜の部は午後7時(ただし、茅ヶ崎のみ6時)開演

問合せ 京浜協同劇団 TEL 044-511-4951
FAX 044-533-6694



前回(2006年12月)の舞台 (Ph:長坂訓弘)

◎文化の仲間通信◎

◆川崎市民劇場 第282回例会

イツツフォーリーズ公演

おれたちは天使じゃない

作 矢代静一／作・作詞・演出 藤田敏雄／音楽

いずみたく／出演 井上一馬・西本裕行・大場泰

正ほか

日程 2月1日～2月8日

会場 宮前・幸・多摩・エポック中原の各市民館

いずみたくのなつかしいメロディにのせておくる
日本ミュージカルの傑作!

問合せ 川崎事務所 ○四四一・二四四一・七四八一

溝の口事務所 ○四四一・八五五・五九一六

◆歌舞劇団 田楽座 川崎公演

ふるさとこよなく吉日燦燦

平成19年度文化庁『舞台芸術の魅力 発見事業』

日程 2月24日(日) 開演 午後二時

会場 エポックなかはらホール

入場料(指定) 四〇〇〇円(売切)／三五〇〇円

(自由) 三〇〇〇円／高校生以下二〇〇〇円

プログラム 第一部 金浦神楽・廿一田植え踊り・

御田植え万歳 ほか／第二部 水口囃子・津軽お

はら節・とりさし舞・さんさ踊り ほか

主催 田楽座川崎公演実行委員会「でんでん」・田

楽座・文化庁

問合せ 実行委員会 denden0224@yahoo.co.jp

田楽座 ○二六五・七八一・三四二三

◆第2回〈弾談の会びあ〜の〉演奏会

水・ひと・音〜水の都江戸東京〜

日程 3月1日(土) 午後七時開演(開場六時半)

会場 杉並公会堂小ホール

会費 三〇〇〇円(会員二五〇〇円)

第一部 講演「水の都江戸東京」

講師 陣内秀信(法政大学デザイン工学部教授)

第二部 ピアノ演奏 鈴木たか子

安達元彦作曲 MIN・Y・O・I (Y・A・T・A・I・U・S・U・Z・U・M・I) ほか

ドビュッシー作曲 水の反映・雨の庭ほか

主催 弾談の会びあ〜の

後援 杉並区教育委員会

問合せ 市原賤香 ○四二二・五五・四七六七

鈴木たか子 ○三・三三三・〇六九七

◎稽古場を利用して活動しています◎

▼安達元彦のびあ〜の・ふりーすくーる 川崎教室

京浜協同劇団との縁で10年前から稽古場を借りての、小さなピアノ教室です。登校拒否生を対象にした「リースクール」から名前を借りました。

一度ピアノを習ったけれど挫折して諦めていたけれど未練を捨てきれない人、ピアノを習いたいと思っただけで怖気づいている人、などが主な対象です。

既存の教科書は使いません。その人がピアノでやってみたいと思っただけで添って、相談しな

がら、その人自身のピアノの弾き方を自分で工夫してつくっていくことを手助けします。年齢経験不問ですが、音楽学校の受験生は対象外です。

問合せ TEL&FAX ○三・三三三・六一・四一三三
(〒165-0035 中野区白鷺二・五〇一・一三三二)



カット：小野寺晃

■文化の仲間ギャラリー■

若菜とき子

⑩

